

あしよろ・ハードサポート通信

今年は10月に入っても2番やデントコーンの収穫作業が続きました。朝晩はかなり冷え込むようになりましたが、日中は穏やかな天気が続いています。堆肥撒きのような圃場での作業が終わると、いよいよ冬支度が始まります。

◆ 後継育成牛を確保する

酪農場では乳房炎や繁殖、周産期、肢蹄、不慮の事故などで牛舎から淘汰廃用（更新）される乳牛が必ず出てきます。北海道の一般的な酪農経営での更新率は20～30%で、例えば経産牛50頭規模の酪農場だと1年間に10～15頭が、経産牛100頭規模だと20～30頭が淘汰廃用されている、といった感じです。



乳牛を淘汰してできた牛床の空きを埋めてくれるのが後継育成牛（初妊牛）です。後継育成牛の頭数に余裕があれば、乳房炎や繁殖など生産効率が悪くなってしまった乳牛を入れ替えることができますが、後継育成牛の在庫が少ないとなかなか更新できず、効率の悪い乳牛を我慢して搾乳しなければならないこととなります。このような状況が続くと、生産性が伸びない、手間ばかりかかる、飼料費のようなコストがかさむ…など、経営にじわりじわりとダメージを与えます。

◆ 何頭の後継育成牛が必要？

次の表は経産牛50頭規模で、後継育成牛の廃用率を10%としたときの後継育成牛の必要頭数のめやすです。縦軸が経産牛の更新率、横軸は牛群の初産分娩月齢平均です。

経産牛の 淘汰更新率	初産分娩月齢平均				
	22ヶ月齢	24ヶ月齢	26ヶ月齢	28ヶ月齢	30ヶ月齢
15%	15頭	17頭	18頭	19頭	21頭
20%	20頭	22頭	24頭	26頭	28頭
25%	25頭	28頭	30頭	32頭	35頭
30%	31頭	33頭	36頭	39頭	42頭
35%	36頭	39頭	42頭	45頭	49頭

経産牛の淘汰更新率が25%（年間13頭を更新）、初産分娩月齢の平均が24カ月齢の場合、必要な後継育成牛の頭数は28頭になります。経産牛の更新率が高いほど、そして初産分娩月齢が遅いほど、後継育成牛の必要頭数が増えていくことがわかります。

◆ 未経産牛に X 精液を活用する

近年すっかりメジャーになった技術のひとつに雌雄判別精液（X 精液）があります。受胎すれば90%の確率でめすが生まれる、という精液です。雌雄判別処理に賛否があるかもしれませんが、現在「後継育成牛の在庫が物足りない」と感じている経営では積極的に活用し、後継牛を増やすための舵取りをするのも戦略です。

町内にも未経産牛の1・2回目の発情で X 精液を授精し、順調に受胎させている酪農場があります。通常の精液に比べ、X 精液の受胎率はいくらか劣るようですが、未経産牛では概ね問題ない印象です。大規模草地育成牧場でも X 精液の授精をしてもらえますので、預託先での精液の選定も吟味してみると良いのではないのでしょうか。



未経産牛での受胎が振るわない場合は、授精時期より前、子牛の成長段階での栄養や環境にちょっとした落とし穴があることが多いです。もちろん季節的な要因もあります。気になることがあれば、一緒に子牛を見に行きますので、お気軽にご相談ください。

後継育成牛を育てる約2年間は育成経費がかかり苦しい時期もあるかもしれませんが、その牛たちが分娩し始めると、経営の流れがとてもスムーズになります。バケツ搾乳や治療に手間がかかる乳牛をうまく更新できれば、毎日の牛舎作業の時間短縮にもつながります。余った育成牛は、初妊牛として販売することもできます。

酪農経営の基本は、疾病や事故廃用の頭数を減らし、乳牛を健康に飼養することです。しかしどれだけ予防対策に力を入れていても、どうしても淘汰しなければならない乳牛は出てきます。安定したサイクルに向け、経営にとって適正な後継育成牛の頭数確保を再確認していただけたら幸いです。
(久富聡子)

.....
・11月8日、9日に帯広市で北海道酪農技術セミナーが開催されます。詳細を別紙に添えます。今年は久富が、現場で活躍する女性酪農家たちと登壇予定です。

・11月22日13:00より、搾乳ロボット販売店3社（コーンズAG社、デラバル社、GEAオリオン社）をお招きし、「搾乳ロボットについての説明会」を開催します。各社から約20分間ずつプレゼンをいただいたあと、参加者の皆さんからのご質問を受ける予定です。搾乳ロボットの導入を検討している方、導入はまったく考えていないけれど興味がある方、どなたでも参加できます。ぜひお集まりください。